



テタロクヤン

「こちらにどうぞ、おかけください」の意味

館下直子さん(36)
=家具デザイン・製造・販売

—お生まれはどちらです

か。
大人になるまで帯広市での暮らしが長かったんですが、実は千葉県生まれなんです。本当にちょっとした間しかいなかったですけど。

—お仕事は家具の職人ということですが。

高校卒業後、道立帯広高等技術専門学院で家具のデザインや作る勉強をしました。夫とはそこで知り合いました。卒業後、私は販売、夫は家具作りをしつつ、二人で家具工房を開く夢を持ちました。その後、もっと勉強したり、やれることを増やしたいと思って関東に来ました。今は独立し、神奈川県で小さな家具工房を二人で営んでいます。家具を作るのは主に夫で、私は製作補助やデザインのほか事務やホームページを作ったりしています。

—音楽活動もなさっていますね。

帯広でも小学3年生からアイヌの歌やおどりを学んできました。関東に移ったのは2008年で、幼なじみたちが「アイヌレブルズ」というグ

ループを作っていたので、参加するようになりました。レブルズではヒップホップを取り入れるなどいろいろな試みをしました。その後、解散しましたが「ペウレウタリの会」という団体に入り、今も歌やおどりを続けています。体を動かすのが好きなので、とくに「フツレチュイ」というおどりが好きですね。——とても激しいおどりですね。

激しいですね。学校に通っている時って、人と同じ物を持ったり同じことをしたりしていれば安心っていう空気がありますよね。私はそういう空気があまり好きじゃなかったんです。流行にも興味がなかったし。それより一人一人のちがいを大事にできる方が良いと思いますね。みなさんのとなりにいる人を、国籍やはだの色などで分けて見ないで、その人の個性も自分の個性も認め合える世の中になったらいいと思います。

◇
このコーナーでは、さまざまな仕事をするアイヌの人をしょうかいします。

タンベエエラムヤン?

■ヤ(あみ)

「きみこれ知ってる?」の意味

漁ではあみをよく使い、江戸時代の絵にもその様子がえがかれています。材料はオオバイラクサやシナのせいをより合わせて糸にしたものです。あみを作ったり直したりする「あ針」は、サビタやナナカマドなどのかたい木やクジラの骨などで作りしました。川をさかのぼる魚をとるには、やなという魚の通り道をせまくするしかけを作って魚を待ちぶせし、

(富野大喜・北海道大学大学院修士課程1年)

人々を救うため、金のタモあみを持ち、海の上をわたって沖の村へ



そのような話を聞きながら、ほのおを飛び散らせ、ほのおを立ち上らせてししゅうをして暮らしていました。ある時、海の沖の向こうの村、雲が大地にささる所の村のカムイが、私に言つてを送つてきました。「アペウチフチよ、あなたは名高いカムイです。そのあなたも人間の世界がききんになっていくことをお聞きでしょう。沖の村、雲が大地にささる所の村へおこしになって、頭の大きな魚たちをつかまえてください。どうにかして、この世界に食べ物が行きわたるようにしてください」と言うのでした。

女神がすくった魚を陸にばらまくと、たくさんの獲物に変わった



そこへ近くのカムイ、遠くのカムイがマレク(かぎもり)を持ち、タモあみを持って魚をとりに行く。ところがどうしたところなのか、マレクで魚をついても、ぬまいっぱいにいる魚が1ぴきもかからない。タモあみですくおうとするけれども、なぜか1ぴきもすくうことができないのだといいます。どんなカムイがいんでもダメだとか。

いつもいつも針仕事にいそしむ火の女神



すると、聞いていた通りに大きなぬまがあつて、その周りにマレクやタモあみを持ったカムイたちが大勢います。ぬまの中には、頭の大きな魚が身動きもできないほどたくさんいるのですが、なぜか1ぴきも魚がとれませんが、そこで私は自分のタモあみをぬまに入れてひとすくい。すると、あみからあふれるほどたくさんの魚が入りました。それを北海道の村々に向かってまき散らすと、魚がシカの群れやクマ、ウサギやキツネになつて、走りだします。もう一度すくうとまたあふれるほど魚がとれます。それを海に向かつてまくと、大小のいろいろな魚になつて北海道へ向かつて泳いでいきました。私はそれを見てもう安心だと思い、また海原をかたいゆかのようにして家にもどりました。家に入つて金のタモあみをかけ、着物をぬいで金の箱にしまいました。そして、またいつものように針仕事を始めると、沖の村のカムイが、自分の持っている物の中にも一番立派な宝物を送ってくれました。そして「アペウチフチのおかげで、人間たちの世界も食べ物に豊かになりました。お礼に私の一番の宝を差し上げます」と言つてが届きました。そういうことがあつて、またいつもの通り暮らしています。

火はとても身近な神

このお話はオイナ(神謡)の一つです。火はとても身近な神で、人々の側に立って他の神々との間を取り持つてくれるといま

北海道の東側では、火を夫婦の神と考えてきました。他の地域では火をおばあさんとし、日高では金の着物を着ているといひます。ロシア・アムール川流域に暮らすナナイといひ民族では、火の神は赤い服を着たおばあさんだといひわれています。これは日高でのイメージと似ていまひすね。

さて、このお話では女神が活躍します。女神に知らせを送ってきた沖の村を守る神は、どのような神なのかはつきりしません。アイヌの昔話の中では、水平線に向かってすつと行くと、雲が地面から出入りしている所がありまひす。ここが地の果てで、ここで空と地面がつながるのです。そこにある村といひのですから、大変遠い所ひすね。



ききんを救ったアペウチフチ

釧路管内白糠町の話

「四宅ヤエの伝承 韻文編より」